No.

インドネシア国ジャワ島中部地震災害に対する国際緊急援助隊医療チーム　活動報告書

平成19年1月
(2007)

独立行政法人　国際協力機構
国際緊急援助隊事務局

緊災
JR
06-003

序　　文

平成 18 年 5 月 27 日にインドネシア共和国・ジャワ島中部で発生した大地震は、同国に甚大な人的及び物的被害を与えました。日本国政府は、インドネシア国政府の援助要請に基づき国際緊急援助隊医療チームを派遣し、一人でも多くの被災者の痛みを和らげるため、同国で医療活動にあたりました。

最大の被災地バントゥール市に開設した医療チームの診療サイトには、連日多くの患者が詰めかけました。隊員の献身的な活動の結果、10 日間の活動期間中に診療した患者は 1,200 名以上にのぼりました。また今回の派遣では、緊急援助調査チームの発災翌日の派遣、初の本格的な巡回診療の実施、緊急援助後の復興支援プロジェクトにつなげるための調査班の同時派遣など、数々の新たな試みがありました。こうした活動の成果は国内外のメディアによって広く伝えられました。

本報告書はこうした医療チームの活動の成果をまとめたものです。本書を通じて関係者の方々にご報告するとともに、得られた知見を今後の国際緊急援助活動の改善につなげていくことが目的です。関係者の方々からの忌憚のないご意見をいただければ幸甚です。

このたびの地震で犠牲となった方々のご冥福と、今後のインドネシアの一日も早い復興をお祈りいたします。

平成 19 年 1 月

独立行政法人　国際協力機構
国際緊急援助隊事務局長　吉田　丘

被災状況

ジョグジャカルタ市の倒壊家屋

地震の爪あと

診療サイトにて

JDR 医療チーム 診療サイト全景（ジョグジャカルタ特別州バントゥール市）

診察を待つ患者

トリアージ*を行う医師　(*患者の負傷程度に応じた優先順位選別)

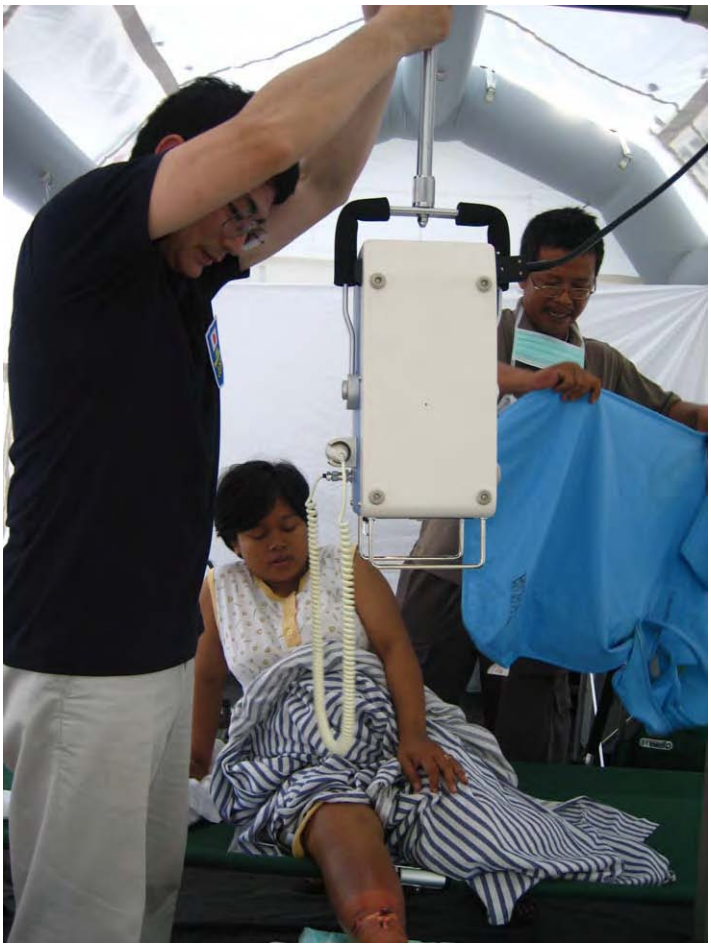
血胸の患者を処置する医師

超音波検査器による妊婦の診察

看護士（右）による症状聞き取り

血圧を測る看護士（左）

薬剤師（右）による処方



レントゲン撮影

受付での症状聞き取り

受付前で患者に聞き取りを行う日本人学生ボランティア

折り紙で被災地の子どもと交流する隊員

巡回診療

イモギリ郡グランチャ村における巡回診療

IOM(International Organization for Migration:国際移住機構)との連携による患者搬送

引継ぎ式

ムハマディア病院への医療資機材の供与式　覚書に署名する副団長

JDR 医療チーム　診療活動を終えて

目　　次

序文
活動写真
目次

１．災害概要
（１）災害の概況 1
（２）インドネシア政府の対応 1
（３）各国の支援状況 2
（４）わが国の対応 4

２．活動概要
（１）派遣目的 7
（２）派遣までの経緯 7
（３）派遣期間およびチーム構成 8
（４）隊員名簿 9
（５）活動日程 10
（６）活動記録（クロノロジー） 11

３．活動報告
（１）活動の特徴 17
（２）医療班 19
（３）看護班 22
（４）薬剤班 31
（５）Ｘ線班 35
（６）検査班 38
（７）医療調整班 40
（８）業務調整班 42
（９）調査班 49

４．添付資料
（１）携行機材リスト 55
（２）活動報告書（先方保健省に提出したもの） 58
（３）供与資機材リスト 69
（４）資機材の供与に関する覚書 70
（５）薬剤リスト 71
（６）Ｘ線診断関連データ 72
（７）報道記事 77

1. 災害概要

1. 災害の概況

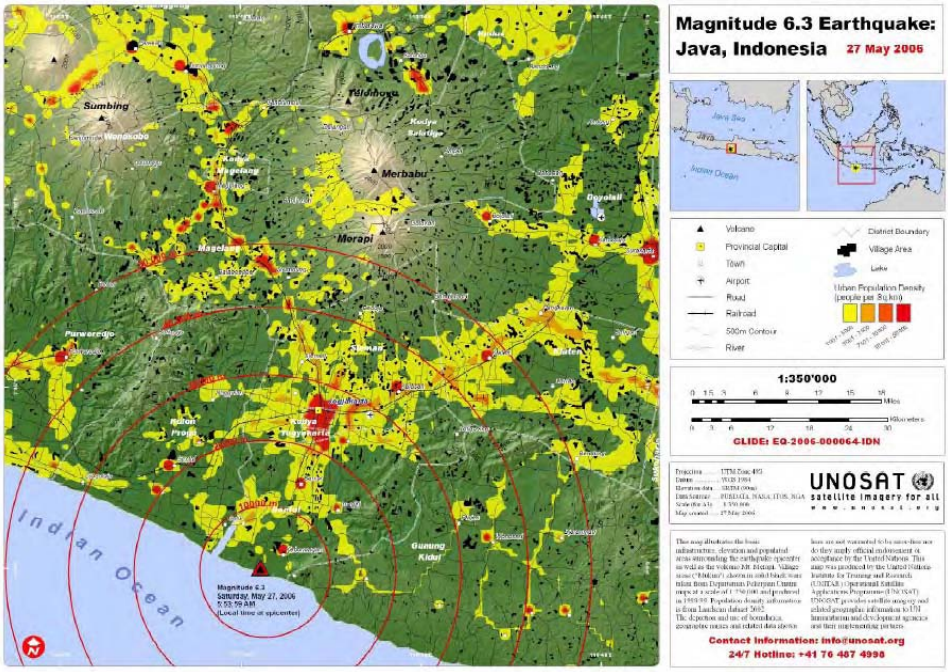
インドネシア国ジャワ島中部で、ジャカルタ時間 2006 年 5 月 27 日（土）午前 5 時 53 分（日本時間同日午前 7 時 53 分）ごろ、ジョグジャカルタ特別州の南南西沖合 37.2 キロ、深さ 35kmを震源とするマグニチュード 6.3 の強い地震が発生した(下記地図参照)。この地震はジョグジャカルタ特別州のほか隣接の中ジャワ島や東ジャワ州など広い範囲にも影響を及ぼした。特に被害が大きかったのは南部沿岸地域で、大半の家屋が全壊もしくは半壊した。震源地が浅いため発生しなかった。一方、先月から活発な噴火活動が続いているムラピ火山は、地震後活動が活発化したとの情報があった。

最終的な被害は以下の規模にのぼっている。

死者：	5,778 名
負傷者：	137,883 名
家屋を失った人：	699,295 名
被災者：	2,340,745 名
損害額：	3,100,000,000 US ドル

(2007 年 1 月 12 日時点)

(出典：CRED: Center for Research on the Epidemiology of Disasters ホームページ)



(出典：UNOSAT)

2. インドネシア政府の対応

インドネシア政府は、地震発生当日にユドヨノ大統領が被災地入りし、翌日にはカーラ副大統領が 3 ヶ月間を緊急援助期として食糧等の供給を最優先させるとする非常事態を宣言した。さらには関係機関が、野外病院の設置、医療チームの派遣、食事配給施設の設置、テント・食料品・毛布・マット・衣料品・発電機・炊飯器具等の物資の提供等の対応をした。緊急援助フェーズが過ぎた後は、国家開発企画庁（BAPPENAS）が中心となり、復旧・復興プランを策定する方針。

3. 各国の支援状況

(1)　政府が派遣する医療チームとしては、日本のほかシンガポール（シンガポール軍の医療関係者 35 名)、マレーシア、フランス（42 名のファーストエイドワーカーおよび医師)、ポーランド（15 名から成る救助者・医師）などが活動を行った。

(2)　救助活動については、マレーシアが 36 人から成る捜索救助チーム派遣した程度であり、ほとんどのドナー国が派遣しなかった。

各国の支援状況（抜粋）

		救助	医療	資金協力	人的支援	物的支援	軍事・輸送支援
アジア・太平洋	日本		26名から成る医療チーム派遣	国際赤十字・赤新月社に US$1,000,000コミットメント、インドネシア政府にUS$4,000,000コミットメント、FAOにUS$200,000拠出	7名から成る調査チーム派遣（要請確認時点で医療チームに変更）	2,000万円相当の物資供与（テント100張、浄水器10台、発電機10台、プラスチックシート100枚、毛布2,000枚、スリーピングマット1500枚、簡易水槽10台）	先遣隊20名、本隊260名派遣（医療活動および防疫活動）
	中国					フィールドホスピタルの提供	
	シンガポール		35名から成る SAF(Singapore Army Force)医療チーム派遣		43名から成るSCDF(Singapore Civil Defense Force) DART派遣	医薬品、毛布の供与	
	マレーシア	36人から成る捜索救助チーム派遣	医療チーム派遣				
	オーストラリア			UNICEFにUS$610,688の拠出、WHOにUS$152,672の拠出、赤十字・赤新月社にUS$4,863,047の拠出			
	ニュージーランド			国際赤十字・赤新月社に316,656拠出			
北米	米国			WHOにUS$150,000供与、IOMにUS$823,290拠出、国際赤十字・赤新月社にUS$1,100,000コミットメント	IOMのロジスティカルサポート	フィールドホスピタル供与	援助物資の空輸支援
欧州	イギリス			WHOにUS$1,125,703供与、UNICEFにUS$1,305,969供与、IOMにUS$2,249,306コミットメント、国際赤十字・赤新月社にUS$1,874,422コミットメント			
	フランス		42名のファーストエイドワーカーおよび医師の派遣	UNICEFへのUS$42,554拠出	5人から成るアセスメントチーム派遣	40トン（US$388,747相当）の人道援助、US$62,112相当のロジスティックス・オペレーション支援、US$27,021相当の医療支援のコミットメント	
	ドイツ					US$55,901相当の医療資機材、49,679相当の医薬品、毛布、浄水器、子供用食料提供のコミットメント	
	ECHO			国際赤十字・赤新月社に2,720,348の拠出、IOMにUS$874,623のコミットメント、WHOにUS$1,020,408のコミットメント			
	オーストリア			赤十字にUS$79,672のコミットメント			
	カナダ			UNICEFにUS$363,636の拠出、赤十字・赤新月社にUS$1,459,038のコミットメント、WHOにUS$227,273の拠出、IOMにUS$542,914のコミットメント			

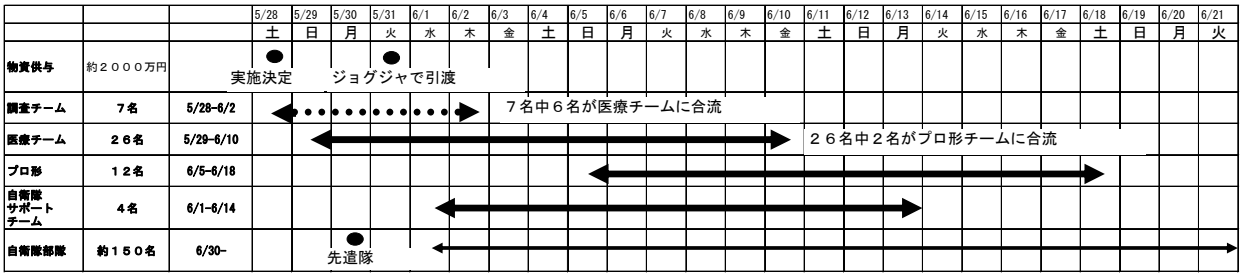
		救助	医療	資金協力	人的支援	物的支援	軍事・輸送支援
欧州	チェコ			UNICEFにUS$32,847の拠出			
	デンマーク			デンマーク赤十字にUS$973,487のコミットメント、国際赤十字・赤新月社にUS$689,194の拠出			
	ギリシャ			US$248,447の拠出			
	アイスランド			WHOにUS$43,000の供与			
	イタリア					ファーストエイドエマージェンシーキット（US$190,000相当）のコミット、ポンプ、毛布、テント、水タンク、キッチンセット）提供	
	ルクセンブルグ			UNICEFにUS$512,820拠出			
	モナコ			WHOにUS$128,535拠出			
	オランダ			国際赤十字・赤新月社に US$1,242,236コミットメント、IOMにUS$1,926,347コミットメント			
	ノルウェー			UNICEFにUS$392,808拠出、IOMにUS$330,000拠出			
	ポーランド	15名から成る救助者・医者（フィールドホスピタル機能つき政府専用機にて活動。医療活動に従事				7トンの人道援助（医薬品、毛布、子供向け食料）	
	スロバキア			UNICEFにUS$32,776コミットメント、インドネシア政府に US$135,404コミットメント			
	スウェーデン			国際赤十字・赤新月社に US$133,156コミットメント、UNICEFにUS$1,642,800拠出、WHOにUS$332,871拠出	Swidish Rescue Service Agencyを通じUN OSOCCの通信チームを支援（1ヶ月上限）		
	スイス			UNDACミッション支援（US$16,529相当）、インドネシア赤新月社にUS$102,362、インドネシア赤新月社にUS$100,000供与（緊急援助物資用）	5名から成るSHA expertsの派遣		
中東	トルコ			インドネシア政府にUS$100,000コミットメント		医薬品（US$50,000相当）	
	サウジアラビア			WHOにUS$100,000拠出、国連人口基金にUS$100,000コミットメント、インドネシア政府にUS$5,000,000コミットメント		300トンの食糧支援、テント2,500張、5,000ラグ、毛布2,000枚、ベッドシート5,000枚、医薬品・医療資機材7,000カートン分 インドネシア赤新月社に救急車10台、トラック7台	

※ReliefWeb上のFTS(Financial Tracking Service)のデータより作成　http://ocha.unog.ch/fts2/pageloader.aspx?page=home
※資金協力については国際機関、国際赤十字・赤新月社への拠出・コミットメントを中心に抜粋

4. わが国の対応

今回の地震災害に際し、日本はインドネシア国政府からの要請に基づき、物資供与、緊急援助調査チーム派遣、国際緊急援助隊医療チーム及び自衛隊部隊派遣、そしてプロジェクト形成チームの派遣を行った。医療チームの活動内容詳細は次章で後述するが、それぞれの対応の概要は以下の通り。

インドネシアジャワ島中部地震災害に対する国際緊急援助の概要



物資供与	５月２８日要請受領。 ５月３０日ジャカルタ着。 ５月３１日ジョグジャカルタ着　同日１５時に州政府に引渡し後、直ちに４つの県に輸送された。 物資内容：テント100張、スリーピングパッド1500枚、毛布2000枚、発電機10台、簡易水槽10台、浄水器10台、 プラスティックシート100巻（合計約2000万円相当）。 ﾄﾋﾟｯｸｽ　：ジャパンプラットフォーム及びIOM（国際移住機関）と本邦及び被災地で連携し、円滑な物資供与のための情報共有を行った。
医療チーム	医療チーム（本隊）は５月２９日に成田を出発したが、現地入りしていた調査チームの身分切り替えにより、同日２９日から医療活動を開始した。延べ１１日間に１，２１１人の診療を行った。 医療チームは被害の大きなバントゥール県の基幹病院であるムハマディア病院前の道路上で活動を実施。同病院は手術などに対応できる能力を有していたが、多くの被災者で混乱していたために十分に能力を発揮できていなかった。医療チームが同病院の役割の一部を担うことで混乱した状況を緩和し、同病院が能力を適切に発揮することができるようになった。
プロ形調査団	６月５日より１８日までの２週間、１２名からなるニーズアセスメント調査団を派遣して、現地の被災状況と日本、ＪＩＣＡに対する支援ニーズを調査中。これまでの報告では、バントゥール県を中心に住宅、学校、地域保健所等の被害が大きく、日本には学校、保健所、生活インフラ等の復旧（無償）、及び教員養成、コミュニティーの復興に係る技術支援（協力隊の短期派遣やコミュニティー強化事業：ＣＥＰ）のニーズが見込まれる。
自衛隊	自衛隊は、5月30日の先遣隊約20名に続いて、6月1日と4日に本隊約130名を2度に分けて派遣。現地にて医療活動とともに防疫活動を行なっている。 自衛隊部隊の活動に対する現地での支援は日本大使館とJICA事務所を中心に行っているが、本部緊急援助隊事務局からも4名のサポートチームを派遣している。

2. 活動概要

1. 派遣目的

(1) 緊急援助隊調査チーム

地震災害による被害につき、関係機関から被災状況や支援ニーズについての情報を収集し、チーム派遣が必要な場合にはその受入準備を行う。

(2) 国際緊急援助隊医療チーム

地震災害による被災者救援のため、インドネシア国関係機関、各国援助機関と協力し、災害に伴う負傷・疾病の治療および地域医療機関の代替となる医療活動を行う。

2. 派遣までの経緯

地震発生から調査チームおよび医療チームの派遣に至る経緯は以下のとおり（以下日本時間)。

5 月 27 日	07:54	地震発生(ジャワ島中部マグニチュード 6.2)
	PM	情報収集、現地との連絡
	17:00	調査チーム派遣準備開始
	18:00	調査チーム派遣決定(2名予定)
	20:39	調査チーム最終派遣人数決定(7名)
	20:52	現地までの航空便確保(香港経由)
	23:59	調査チームメンバー決定
5 月 28 日	08:00	調査チーム成田集合
	10:00	調査チーム成田出発(NH909 香港経由 CI679)
	12:30	F ネット配信
	PM	情報収集、現地との連絡
	18:00	医療チーム派遣メンバー仮決定
	20:32	医療チーム派遣仮決定
	21:12	派遣要請確認(外務公電受理)
	22:30	政府派遣決定
	23:00	医療チーム派遣メンバー正式決定
5 月 29 日	09:30	結団式
	11:25	医療チーム第一陣16名成田発(JL725)
5 月 31 日	11:25	医療チーム第二陣3名成田発(JL725)

3. 派遣期間およびチーム構成

○ 緊急援助隊調査チーム（派遣期間 2006 年 5 月 28 日から6月 10 日まで）

団長	1名（外務省）	6 月 2 日帰国
副団長	1 名（JICA） 医療チーム副団長へ変更	5 月 29 日から医療チーム
医師	2 名	5 月 29 日から医療チーム
看護師	2 名	5 月 29 日から医療チーム
業務調整員	1 名（JICA）	5 月 29 日から医療チーム
	計 7 名	

○ 医療チーム第1陣（派遣期間 2006 年 5 月 29 日から 6 月 10 日まで）

団長	1 名（外務省）	6 月 5 日大使館員と交代
副団長	1名（医師）	
医師	1名	
看護師	5名	
薬剤師	1 名	
医療調整員	4名	
業務調整員	3 名（内 JICA1 名、JOCA 名）	
	計 16 名	

○ 医療チーム第2陣（派遣期間 2006 年 5 月 31 日から 6 月 14 日まで）

医療調整員	1 名	6 月 10 日帰国
業務調整員	2 名（JICA）	14 日以降 18 日までプロジェクト形成チームに変更
	計 3 名	

4. 隊員名簿

1. 先遣隊（派遣期間 2006.5.29～2006.6.10） ＊ 本団と合流後、医療チーム

No.	氏 名	所属先	指導科目
1	丹野 克俊 Mr.TANNO KATSUTOSHI	医療法人社団カレスアライアンス日鋼記念病院 救命救急センター 救命救急センター長	救急医療
2	田邉 晴山 Mr.TANABE SEIZAN	日本医科大学附属病院高度救命救急センター	救急医療
3	石井 美恵子 Ms. ISHII MIEKO	北里大学大学院看護学研究科	救急看護
4	高以良 仁 Mr.TAKAIRA HITOSHI	独立行政法人国立病院機構災害医療センター 看護部 看護師	救急看護
5	光本 政彦 ※～6/2 Mr.MITSUMOTO MASAHIKO	外務省経済協力局技術協力課国際緊急援助室 事務官	業務調整
6	山田 好一 Mr.YAMADA YOSHIKAZU	JICA国際緊急援助隊事務局	業務調整 本体合流後、副団長
7	大友 仁 Mr.OTOMO HITOSHI	JICA国際緊急援助隊事務局（JOCA）	業務調整

2. 医療チーム本体（派遣期間 2006.5.29～2006.6.10）

No.	氏 名	所属先	指導科目
1	畠 薫 ※～6/6 その後引継 Mr.HATA KAORU	外務省アジア大洋州局南東アジア第二課	団長
2	冨岡 譲二 Mr.TOMIOKA JOJI	医療法人財団池友会 福岡和白病院	副団長（救急医療）
3	小笠原 智子 Ms.OGASAWARA TOMOKO	独立行政法人国立病院機構災害医療センター	救急医療
4	武川 礼子 Ms.TAKEKAWA REIKO	埼玉医科大学総合医療センター	救急看護
5	後藤 順一 Mr.GOTO JUNICHI	日本医科大学付属病院	救急看護
6	金澤 豊 Mr.KANAZAWA YUTAKA	長浜赤十字病院救命センター	救急看護
7	川谷 陽子 Ms.KAWATANI YOKO	愛知医科大学病院	救急看護
8	日野 眞里 Ms.HINO MARI	国立国際医療センター	救急看護
9	加藤 あゆみ Ms.KATO AYUMI	日本医科大学付属病院	薬剤管理
10	木倉 充 Mr.KIKURA MITSURU	有限会社 ワハナ ジャパン	医療調整
11	赤田 幸恵 Ms.AKADA YUKIE	北海道大学大学院	医療調整
12	倉島 勝治 Mr.KURASHIMA SHOHJI	国立国際医療センター	医療調整
13	藤山 章子 Ms.FUJIYAMA SHOKO	医療法人雪ノ聖母会 聖マリア病院	医療調整
14	野村 留美子 Ms.NOMURA RUMIKO	JICA国際緊急援助隊事務局	業務調整
15	山本 耕輔 Mr.YAMAMOTO KOSUKE	社団法人 青年海外協力協会	業務調整
16	匠 陽子 Ms.TAKUMI YOKO	社団法人 青年海外協力協会	業務調整

3. 追加調整員（派遣期間 2006.5.31～2006.6.10）

1	渡部 直人 Mr.WATANABE NAOTO	株式会社 両国屋	医療調整 Paramedic

4. 追加調整員（派遣期間 2006.5.31～2006.6.14）

1	大野 憲太 Mr.ONO KENTA	JICA地球環境部	業務調整 Coordination
2	内藤 智之 Mr.NAITO TOMOYUKI	JICAアジア第一部	業務調整 Coordination

5. 団長（交代引継）（派遣期間 2006.6.6～2006.6.9）

1	室永 武司 Mr.MURONAGA TAKESHI	在インドネシア日本国大使館 一等書記官	団長

5. 活動日程

月日	活動
5月28日	○ 調査チーム10:10成田発→13:35香港着(NH909)→香港発16:10→19:50ジャカルタ着(CI679)→ホテル着21:30 大使館、JICAブリーフィング
5月29日	○ 調査チーム 6:00ジャカルタ発→7:40ソロ空港到着→10:30宿舎着→11:00州保健局表敬および情報収集→12:30活動候補地視察、活動地決定、設営開始→14:00診療開始→16:00診療終了→17:106宿舎着 ○ 医療チーム1陣 11:25成田発→17:00ジャカルタ着→18:30ホテル着 大使館、JICA事務所よりブリーフィングを受ける
5月30日	○ 調査チーム 7:00宿舎発→8:50診療開始 ○ 医療チーム1陣 8:20ジャカルタ発→10:00ジョグジャカルタ着→11:15バントゥール県ムハマディア病院到着→病院視察、打ち合わせ→13:00診療活動および診療所設営→17:50診療終了→17:30宿舎着
5月31日	○ 診療活動 ○ 医療チーム2陣 11:25成田発→17:00ジャカルタ着→18:30ホテル着
6月1日	○ 診療活動 ○ 医療チーム第2陣8:20ジャカルタ発→10:00ジョグジャカルタ着→11:15活動サイト到着
6月2日～7日	○ 診療活動
6月8日	○ 診療活動→13:00撤収作業→16:10引渡し式
6月9日	○ 11:00ホテル発→13:00ジョグジャカルタ発→14:20ジャカルタ着→16:00大使館活動報告→22:30ジャカルタ空港着
6月10日	○ 0:25ジャカルタ空港発(JL726)→9:45成田空港着→10:00解団式

6. 活動記録

5 月 29 日（火）　調査チーム活動 1 日目

28 日深夜に医療チームの派遣が決定したため、その受け入れのため早急に活動地を探す必要があり、州保健局で聞き取り調査を行った後、候補地 3 箇所の現地調査を行うこととした。1ヶ所目の視察場所であるムハマディア　バントゥール病院）を視察したところ、病院内の廊下にも患者があふれている状態で、病院前の大通りも、避難民テントで封鎖されており、多くの傷病者が収容されていたため、ニーズは高いと判断しサイトをそこに決定した。

午後早急に簡易診療所を開設し、診療を開始した。診療は午後 2 時からであったため、この日の、診療数は、13 名であった。

宿舎はジョグジャカルタにあるホテル(Nature Garuda Hotel)となった。地震の影響は少ないが、一部地震のために利用できない部屋や、雨漏りする部屋があった。また、この日より調査チームから医療チームに変更された。

5 月 30 日（水）　医療チーム活動 2 日目

本日 11 時過ぎに、医療チーム本体が合流し、診療活動と診療所設営の同時並行で活動した。

副団長の２名が災害センター、保健省災害対策本部、現地警察署に出向き情報入手並びに打合せを実施した。

今回のオペレーションでは日本関係組織として我々が最初に入ったチームであることから、マスコミから好意的に取り上げられており多くのマスコミから取材（ＮＨＫ、朝日放送、日本テレビ、フジテレビ、朝日新聞、日本経済新聞、共同通信、東京新聞、中日新聞、読売新聞とローカル数社）を受けている。

この日の診療患者数は 46 名で全員が外傷患者であった。診療時温度は、30 度、湿度 70%であり、業務環境としては厳しく、疲労が蓄積していると思われるが、今のところ大きく体調を壊したものはいない。

5 月 31 日（木）　医療チーム活動 3 日目

本日午後から JICA 事務所員、通訳を含む 7 名のニーズアセスメント・巡回診療チームを形成し、イモギリ郡グランチャ村、ペンコル村を調査し、グランチャ村では、診療を実施したが、ペンコル村は死者、重傷患者、軽傷患者ともにいなかった。各村においては伝染病も発生は見られなかった。調査時には、NHK 及び産経新聞が同行した。また本日自民党議員の訪問があった。

本日の診療患者数は 103 名（うち、診療所にて 97 名、巡回診療にて 6 名）103 名のうち、外科 73 名、内科 30、再診は 7 名、超音波検査 1 名実施（妊婦）した。

バントゥール県対策本部によれば、5 月 31 日現在の被害状況は以下のとおりである。

死者数　：4,016 名
重傷者数：8,315 名
軽傷者数：6,969 名
全壊家屋：15,403 軒
半壊家屋：12,965 軒

ジョグジャガルタ市内のジョグジャカルタプラザホテル（ホテルから車で 15 分の場所）において

UNOCHA 主催のドナー・コーディネーション・ミーティングが毎日行われている。団長以下 2 名が参加した。国際機関・国際 NGO 等が主な出席者で、最新の被害状況の報告、各セクター別の支援状況の報告などがなされた。

６月１日（金）　医療チーム活動４日目

本日は午前、午後各６名のニーズアセスメント・巡回診療チームを形成し、ジュティス郡トリモヨ村プトン地区を巡回した。巡回診療により、鎖骨接骨による２５歳男性の重症患者を、ＩＯＭ（国際移住機関）手配の救急車にてムハマディア病院に移送した。また、ＭＡＤＩＡ（Society for Inter-religious Dialog：国内ＮＰＯ）の要請により巡回診療に同行させ、ＭＡＤＩＡが同地区で食糧（米、水、ジュース等）の配給を行った。

本日の診療は、診療患者数 122 名（うち、診療所にて 95 名、巡回診療にて 27 名）であり、１２２名のうち、外科７割程度、内科３割であった。また、レントゲン撮影により１２名（男８、女４）の診察を行った。

マスコミ取材も引き続き多く、毎日新聞、産経新聞、聖教新聞、フライデー等の本邦メディア取材があった。

6 月 2 日（土）　医療チーム活動５日目

本日は午後 4 名のニーズアセスメント･巡回診療チームをバントュル県ジョンブラン村に派遣した。

本日の診療患者数は 159 名（うち、診療所にて 130 名、巡回診療にて 29 名）再診は本部と巡回診療を合わせて 16 名。レントゲンによる 29 名の診療を行った。検査体制も整っていて、ピッコロ 2 名・心電図 2 名・エコー2 名・尿検査１名を実施した。また、昨晩、現地テレビ番組で医療チームの診療所が紹介されたらしく、昨日に比べ患者数が増加したものと思われる。

本日から現地大学に留学中の日本人 3 人がボランティアとして医療チームに協力を開始した。特に本日は金曜日であり現地通訳 6 人がお祈りのため一時引き上げた際通訳が手薄となったが、彼らの協力もあり活動が遅滞なく実施できた。

マスコミ取材も、日本、外国、現地メディアと引き続き多数あるが、NGO、現地日系会社、などの訪問も多く受けている。またそうした訪問者からの差し入れなどもあった。

6 月 3 日（日）　医療チーム活動６日目

本日はムハマディア病院前のサイトでのみ診療活動を行った。医療チームとしての新しい活動の取組みを探るためにムハマディア病院の臨時病棟を視察した。また、感染症に関する会議に副団長以下３名が出席した。

本日の診療患者数は 130 名（新患 103 人）で、再診は 27 名。130 名の本部での診療患者に関して、外科は減少してきている。慢性疾患や他に ASD とみられる不眠等が増えてきている。レントゲン機器は昨日自衛隊サポートチームが持参した部品を交換し、良好に稼動している。レントゲンによる 24 名の診療を行った。

若干疲れが出ている隊員もいるが、体調に大きな異常はなく、概ね健康である。昨日から交代で半日の休息をとるようにし、本日は調査チームとして先に派遣されたものを中心に３名が午前中休息をとった。また、隊員の健康管理のために昼休みをしっかり１時間取るようにするとともに、脱水症状におちいらないようにチーフドクターとチーフナースの指導の下、水分補給に対する努力を行っている。

ムハマディア病院視察時に看護ニーズを確認したところ、軽症患者や手術後一定時間を経過した患者を収容するために高校を利用して設置した臨時病棟でのニーズの可能性が示唆されたところ、同臨時病等を視察したが、患者に対するケアはある程度適切に行われており、JDR 医療チームの看護師が介入する必要はないとの結論を得た。

団長が参加したイギリスと米国などによる復旧に関する会議の場で、緊急支援とそれに続く復旧復興の支援を継目なく実施しようと努力しているのは現時点では日本だけであるとの報告があり、日本の援助が高く評価されていたとのこと。

母国救援のため、日本から赴いてきた、東京医科歯科大学卒で現在日本の病院で働いているインドネシア人医師から日本チームに合流して活動したいとの申し出があった。この申し入れを JICA として受入れ明日よりチームのメンバーとして活動に加わる予定としている。

6 月 4 日（月）　医療チーム活動 7 日目

本日はムハマディア病院前のサイトでの診療活動及び巡回診療を行った。診療患者数は 132 名（うち診療所にて 126 名、巡回診療にて 6 名）、診療所での 126 名のうち、新患 110 名、再診 16 名。全 132 名のうち、外科 58 名、内科 74 名であった。

レントゲン検査約 20 名実施、超音波検査 2 名実施、血液検査実施しなかった。

巡回診療は 6 名で実施し、ギランハルジョ村にて計患者５名に対し診療活動。うち１名は IOM に依頼し搬送。また、同じく IOM の依頼を受け１名の重症患者に対し診療し、さらに、ポトロノ村にて、１名の重症患者を診療した。

本日より、ラーマン医師（日本医科歯科大学卒、取手協同病院勤務のインドネシア人医師）が活動に参加した。また、新たに日本人留学生１名が、医療チームに対し、ボランティアとして協力を得ている。既にサポートを得ている３名の日本人とローテーションを組み、通訳として支援を受ける予定である。そのほか日本人およびインドネシア人からのボランティアの申し入れがあったが、マンパワーは足りているため、丁重にお断りしている。

UNOCHA の主催の、ドナー・コーディネーション・ミーティングが開催された。副団長が参加した。これに伴い保健クラスター調整会議が特別州保健事務所にて毎日 17 時から実施されている。

本日は、民主党議員団の訪問があったほか、現地メディアの取材やインドネシア政府側の視察もあった。

6 月 5 日（火）　医療チーム活動 8 日目

本日の診療患者数は 159 名新患 134 名、再診 25 名。外科 57 名、内科 102 名）であった。レントゲン検査 17 名（男性 10 名、女性 7 名）実施、超音波検査 2 名実施、血液検査１名実施、尿検査１名実施した。

本日も WHO 主催の保健クラスターの会議に３名出席し、診療状況の説明（診療患者数、医療従事者等について）、現場で直面している問題の共有、今後の対応、について主催である WHO を中心にして話し合われた。

隊員１名が本日活動サイトで３時間ほど点滴２本を受けて療養。現在は回復している。

6 月 6 日（水）　医療チーム活動 9 日目

本日の診療患者数は 158 人（133 人新患、25 人再診：これまでの合計 1031 人）であった。レント

ゲン 16 名（男 6 名･女 10 名）、エコー3 名であった。

患者数の増加は、撤収の時期を掲示（昨日）したことに起因すると思われる。外傷者は減っているが内科系の患者が増えている。また本日は、チーフナースを中心に保健所（プスケスマス）の調査を実施した。

今日から学校が始まり、明日から会社も本格的に始動するようで、復興へ向けインドネシアの機能も回復してきている。

マスコミの取材も朝日新聞をはじめとし、現地新聞等多数あった。

6 月 7 日（水）　医療チーム活動 10 日目

本日正規診療の最終日であったため患者も多く、診療患者数は 180 人（新患 143 人、再診 37 人）、うち放射線診療　16 人（男性 8 人、女性 8 人であった。本日までの診療患者数　合計　1,211 人となっている。

機材は、保健極に供与の予定だが、薬剤は捨てずに自衛隊日本赤十字に供与していく予定よしている。

また本日はインドネシアにて活動中の協力隊 2 名がＪＤＲのサイトの手伝いをしてくれた。この２人は明日も手伝いをしてくれる予定である。

6 月 8 日（木）　医療チーム活動 11 日目

本日８日は、診療活動は行わず、診療所の撤収作業を実施。念のため、医師１名、看護師１名により急患等に対応可能な体制をとったが、診療を要す患者は来所せず。

午後ムハマディア病院前で引渡し式を実施し、インドネシア側から、保健大臣及び保健本省職員、州保健局長、県保健局幹部職員、ムハマディア病院院長及び看護部長ら病院職員らの出席を得た。資機材の受領書（MOU）には、副団長と州保健局長が署名し、保健大臣・州保健局長の承認のもと、ムハマディア病院で使用されることとなった。また、チームの活動報告書を保健大臣に提出した。なお引き渡し式の様子が、ＮＨＫ及び現地メディアが取材された。

機材の引渡しに際して、ムハマディア病院の機材管理者に対し、機材の使用方法、エアテントの設営・管理方法等の説明を行った。

医薬品提供の要望のあった自衛隊部隊及び日本赤十字社に対して、本日８日、医薬品を提供した。

ジョグジャカルタ市内の国連調整事務所（Coordination Cell）のリーダーである Puji Pujiono 氏（OCHA Regional Disaster Response Advisor）をはじめ、IOM および地元警察等協力のあった期間に対しに対し、　　山謝意を表した。

引渡し式の様子を、ＮＨＫ及び現地メディアが取材。

6 月 9 日（金）　医療チーム活動 12 日目

本日午後 13：00 にジョグジャカルタを立ち、午後 16：00 に大使館に報告が行われた。大使への報告は、全体で 30 分位、出席者は大使をはじめ大使館職員と JICA 側 から所長と所員 1 名であった。医療チームは、副団長 2 名、チーフナース、業務調整員 1 名の計 4 名が出席した。大使からは、インドネシア国福祉調整大臣が日本の国際緊急援助隊医療チームの活動を高く評価していることを大使に伝えてきた旨、大使より発言があった。

20 時 30 分にジャカルタ空港にチェックインし 00:25　ジャカルタ発（空路）　JL726 便で帰国した。